

かりめたし

C Em An G C Em An G

G D C G
北のはすれの内地に 雁渡し 炊く頃

G D C G
ロシアから渡ってくるマガンの群れたち

C G An G
ねじら求めて北風(の) 天敵から身を守るこの水辺に

C G
タンク(の)コウトリ 一緒になつたね

An G
おまそ一年ぶりになるかな

G D C G
地響きのような鳴き声 いっせいに飛いたち

G D C G
いくつもの「入」を描いて 夕暮れの中に

C G An G
百羽のマガンが身を寄せあう つかの間のねの 冬期湛水

C G
冷た...雪が降ってもかまわない

An G
土に守られた憩いのひととき

G An C G
市街で見られる 里山 淡い黒に霞んで見える

G An C G
田んぼや畑のあとの 向こう 帯のように 連なり広がる

An G An G
たろに 軽トラみつけるおかげで 人の姿は見かけることもない

C Em An G C Em An G

G D C G
冬のすみか 住みかねぬ 暮に 別れが訪れ

G D C G
日本を離れていく マガンの群れたち

C G An G
ふるさと求めて 南国に 入り 新しい家 夜 増やすために

C G
日本での 食事 美味い かつ かな

An G
水辺で 羽根を 休められたかな

G D C G
地響きのような 鳴き声 いっせいに 飛いたち

G D C G
一面 マダラ の 様に 青空に 溶け込み

C G An G
6万のマガンが 次は 飛いたつ 数ヶ月前の 北の 関東の 国へ

C G
冷たい 風が 吹いても かまわない

An G
生まれたところ にならうものはない

G An C G
遠くまで 見られる 里山 淡い 紺に 霞んで 見える

G An C G
わずかに 残る 緑の 向こう 少し ずつ 分かれて 見える

An G An G
たろに エンジン 聞こえる おかげで 人の 気配は 感じる こともない

C Em An G C Em An G